

《正岡子規 (36) の続き》その 294

天涯茫茫

寺田寅彦の続き。

寅彦の専門は実験物理学で、東大物理学教授であるが、同時に航空研究所の研究員であり、地震研究所の所員でもあり、また理化学研究所にも属していた。物理学が中心であるが、気象学、海洋学などの研究者でもあった。愛弟子の中谷宇吉郎(雪の人工結晶で有名)が北大理学部教授時代、招かれて地球物理学の特別講義に来たことがある。東大理学部出身の長男東一が中谷の教室の助手になっていたから、その生活を見ることも目的の一つであった。昭和7年のことだから、死の3年前のことである。

専門以外の趣味の領域では、大好きな音楽がある。自らヴァイオリン、セロを弾いた。師の田丸卓郎の影響であり、後年合奏をしたりにしている。

絵も好きで、油画を描き、展覧会にもよく足を運んだ。映画も好んで見た。初期の西洋映画の殆んどを見ているようだ。絵画の展覧会や映画の批評の文をよく書いていた。

俳句は漱石に教わり、子規にも導かれた。連句にも興味があり、松根東洋城、小宮豊隆としばしば一巻を巻いた。

活動の範囲が広いことから推すと、健康そのものように思えるが、病氣勝ちで、大学生のとき一年休学しているし、教授時代も胃潰瘍のため二年に亘って療養している。あまり長期に休んでいるので退職を申し出ているが、総長や部長に慰留されて留任した。

寅彦の随筆家として名を成したのは、この二年間(大正9年以降)の療養期間中のつれづれを慰めるために随筆を多作して各種の雑誌に発表したことが端初であるが、もともと文を綴ることを好んでいた。大学生の時代から「ホトトギス」に写生文を発表していた。なかでも亡妻のことを記した「団栗」は有名である。

寅彦には、昭和3年に書かれた「子規の追憶」という作品がある。その大要は以下の如くである。

1. 子規が自然科学の理解力に富み、科学的な事柄に興味を持っていたこと。
2. 学芸の純粋な進展に対して、社会的の拘束が与える障害について不満を表したこと。
3. 子規が非常に若々しく、水々しい人であった。瀕死の肉体で、あれだけの食欲を持続し、事業を成し遂げたこと。

全集は三回発行されているが、「文学篇」全18巻、「科学篇」全6巻がある。

公的には素晴らしい業績を挙げたようだが、家庭的には初婚と再婚の妻には死に分れ、第三の妻は「変り者」(次男正二の言)で、家

庭内には「暗雲が漂う」ことが多かったという(長男東一の手記による)。

列伝⑫

河東碧梧桐(本名秉五郎)

生年 一八七三(明治六・二・二)
 歿年 一九三七(昭和一二・二・一)
 享年 65歳
 死因 腸チフス

俳人として最も著名であるが、ジャーナリストとしても各方面に活躍し、その活動は多方面に及んでいる。旅行家、登山家としても名を成した。

書道では六朝風の独自の書風を開拓し、能楽で宝生流を学び、玄人の域に達し、舞台ではワキを得意とした。また葛野流の太鼓を学んでいた。

松山藩に仕えた儒者、河東静溪の第8子、第5男。正岡子規もこの父の教えを受けた。

中学時代、子規からはじめて野球の手ほどきを受け、やがて俳句の指導もうけるようになり、高浜虚子とは同級で、彼を子規に紹介した。

明治26年、京都の三高に入学、翌年学制改革によって、仙台の二高に転じたが、学風になじめず、わずか三ヶ月で虚子と共に退学、以後は就学しなかった。

〈この項続く〉